

談話室

投稿をお待ちしています。この「市民談話室」は、市民の皆さんの意見交換の場です。テーマは自由です。あなたがふだん思っていること、お書きになって気軽に寄ってください。紙面の都合上、文を短くすることがあります。あて先は、〒950-112 白根市大字白根二二三五 白根市役所企画調整課広報広聴係です。



さつきは豊作祈願の大仕事 生命の親、田植えについて



吉田すみ子さん(下鷲ノ木二・会社員・40歳) 老人同居生活に思う

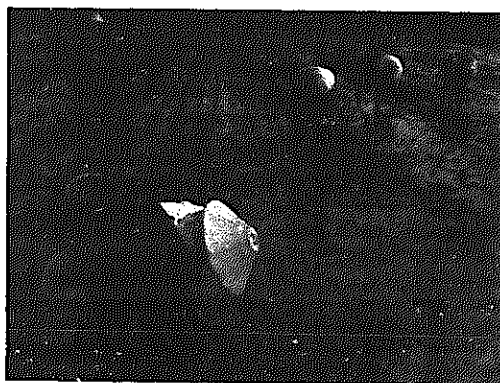


俳句



満開の桜風吹が雪風吹 栗賀 俊雄
大風の追ひつ追はれつ川の上 大森 豊治
雨降ればなを疲れ来し春の宵 渡辺 勤
水仙を活けて句師の供養待つ 五木 長吉

雪も消え、冬も終り、越後に初夏の兆しが流れてくる。農村の最も忙しい季節の到来です。「猫の手も借りたい」ということわざは、まさに農家の「さつき」時期から考え出されたものなのです。
さつきは昔から豊作祈願としての祈りを込めた大仕事でした。田の神様をお迎えして田植えをするわけですから、早乙女や牛、



馬にもさつき衣装を身に着けさせます。さつきももひき、さつき笠、さつきこて、さつき脚絆、すべてを新調し、田植歌「そろたそろたよさなえがそろた」「なえを植えましょみんなのために 今年豊年 国のため」を歌いながらの作業です。
さつき仕事が終わると「仕事しまい」といって、夕飯のぜんにはさつき魚や山海の珍味で、祝儀なども付けて大サービスをし、豊じようを祈願します。
「しつけ半作」という言葉もさつきから出たものです。さつきには親族、縁者、隣人など二十人から三十人くらいが集まり、作業を手伝います。
田植えも終わり、豊じよう祈願も終わり、農村は平和な姿に戻ります。越後平野に植えられた早苗が風を受けて銀波の中こそよぐ。これこそ越後平野の田園風景です。米は生命の親。苗代こそ増産の温床です。

二月というのに小春日和を感じさせる日曜日の朝「ばあちゃん、朝飯食べたかね」。近所のおばあちゃんの元気の良い声に「今しもたどこでー、先に行つて待つてくれねー」。
なにやら朝早くからゲートボールの練習らしい。例年ならば、こたつの中でお茶を飲みながら世間話、という生活パターンを思わせますが、今年の冬は拾い物をしたような穏やかな日々が続く、老人クラブもゲートボールの腕を一段と上達させたことでしょう。
いそいそとステイック片手に自転車で走り去る後ろ姿に、六十七歳の年を感じさせないわが家の祖母です。練習の合間に孫の様子なども話題になり、真剣に語ることもあるとか。「家の孫はこうなんだが、おまえさんとはどうかね。親はなんにも注意しないが、おまえさんどう思うね」とまあこんなぐあいら

しいです。
祖母はひとときともボケケリとした姿を見せたことがありません。こんな祖母を子供たちは、おばあちゃん知恵袋と呼んで尊敬し、それぞれの立場で知恵袋の助けを借りて成長してきました。また、私たちも安心して小さな子供たちを託し、共働きを続けてこられたのです。
長男長女時代と言われる最近では、二世帯同居どころか長寿命に伴い三世帯同居にもなるわが家と言われている。私たち若い世代(とは言えないかな?)は気張った生き方ばかり主張しないで、お年寄りや、新人類と呼ばれる最も若い人たちとの間で、もつと素直に自然の触れ合いを通じながら、いちばん大切な土台、家庭や家族の関係、役割などを見つめ直さなければならぬ時期ではないだろうか。
こんなことを真剣に考える今日このごろです。



付けられた名前前は 母が私を生んだ年齢



今後の農政改革 私はいっつも考える

「三十二」。これが親から名付けてもらった私の名前です。ミンジとかサンジューニとか呼ばれると、なんて変な名前を付けたんだろうと親を恨んだりもしました。父は明治二十年生まれで一昨年に他界。母は明治二十九年生まれで、老衰のため今年の二月、やはり他界しました。
私が生まれたのは母が三十二歳の女盛り?そのせいか元気すぎるくらい私の私を見て、父は親孝行には縁のない子と思いつつ、でも後々母の年齢がわかるように、母が私を生んだ年齢(数え)を取って「三十二」と名付けたと聞いています。親

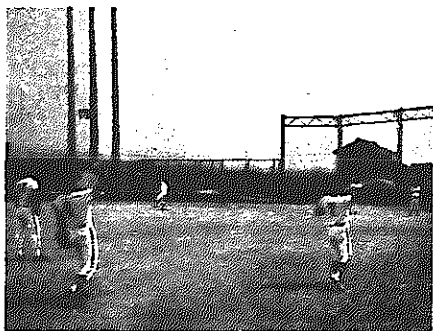
最近の農業農政批判の高まりは、消費者の求める食糧を適正な価格で安定的に供給する、という基本的な役割を十分に果たしていないことに対して、国民の不満が噴き出したものではないでしょうか。特に現在、食糧制度に守られた「米」は、日本農業の象徴であるだけに批判の集中砲火を浴びています。

経団連の「食糧見直し」に全国農協中央会が反発し、二十一世紀に向けた農政の基本方針の中間報告書の中で「生産性の高い水田農業の確立価格政策の見直し」を提言。政府、農業団体、産業界、それぞれの立場での考え方は、生産性の高い産業として自立できる農業確立を目指している点で共通しています。

食糧制度は、戦時中の食糧不足を乗り切るために昭和十七年にスタートした制度ですが、現在は状況が一変しています。飽食の時代と呼ばれ、消費者の要求が多様化している今日では、食糧制度が的確に対応しているとはいえないと思います。また一方で「稲作は日本人の心である。農業も国民のものだ」という認識もあります。
互いに反論、反発をし合っているだけでは建設的な議論にはならないと考えます。生産者、農業団体、消費者、産業界などで構成する「農政について国民的なコンセンサス形成の場」を設定し、どういった農業政策が望ましいかを議論すべきではないでしょうか。農林水産省、全国農協中央会が急いで積極的にこうした場の設置に取り組む必要があると思います。

グループ紹介⑩

白根壮年野球クラブ



4月19日、5月の下越大会に向け、練習開始

前身の「白根ルートクラブ」は、選手の健康や家庭上の都合で自然消滅してしまいましたが、「このままではいかん」と、あきらめきれない生き残り昭和56年に再結成されたのが、このクラブです。
監督の松原和夫さんは「一人前のおやじもだから、いろいろな用事でなかなかベストメンバーが集まりませんが、勝率5割を目標にしている」と話します。昨年も県の壮年野球連盟や、市の連盟の大会など、22試合をこなしました。現在のメンバーは40~60歳代の約30人。ほとんどが草野球の監督経験者で、連盟の審判員の現役もおおぜいいます。ベテランだけにマナーも十分心得ており、野球全体のレベルアップのため、地域の子供たちの指導や、若い人のチームとの試合も積極的に行っています。
しかし、いったん酒が入ると「身振り手振りを交え、口角泡を飛ばしながら野球論議が始まります。『なんという野球バカの集団』とお互い驚いています」と松原監督。クラブに入りたい人(市内に在住、在勤)は、松原監督(白井・☎373-5200)へ。

キャフテンの声

阿部恒也さん (隔向台団地・自動車車体整備業・49歳)

チームのまとまりもよく、メンバーも互いにけががないようにといたわり合う思いやりのある人ばかりです。やはり皆さん、年齢とともに丸くなるせいでしょうか。最近では趣味が多様化して野球熱も全体的に下がりがみで、若いチームも育ちにくいですが、なんとか盛り上げていきたいですね。